

関西大学教育推進部は、伊丹市教育委員会のご協力のもと、大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」(以下、本取組と表記)の高大連携事業および広報活動の一環として、「考動力」作文コンテストを開催しました。第 2 回となりました今年度は、昨年度より大幅に応募数が増え、高校生の部と大学生の部を合わせて 1,203 作品の応募がありました。応募作品の内訳は、高校生の部 1,070 作品(小論文部門 702、ショートショート部門 368)、大学生の部 133 作品(小論文部門 127、ショートショート部門 6)でした。多数のご応募ありがとうございました。応募者ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

ご応募いただいた作品の審査は、本取組企画運営部会メンバーとライティングラボ TA、さらに、教育開発支援センター(CTL)の田中俊也センター長、神戸市立工業高等専門学校講師であり CTL 研究員でもある林田定男氏、同研究員の佐々木知彦氏、の合計 37 名で行いました。その結果、大学生の部では小論文部門で優秀賞 3 作品、ショートショート部門で最優秀賞 1 作品をそれぞれ選出するに至りました。

以下、部門ごとに講評を述べます。

【小論文部門講評】

小論文部門では、本コンテストが求める文章を、「自ら問いを設定し、問いに対する答えを客観的根拠に基づき主張できる論証型の記事」と定義しました。この定義をもとに、「課題意図の理解」「全体の構成」「論証の方法」「自分の立場・意見」の 4 つの観点から審査を行いました。まず、こちらが提示したキーワードや要素が欠けているなどの要件を満たしていない作品については、厳しい評価をつけさせていただきました。また、「剽窃(ひょうせつ)」も厳しくチェックいたしました。文献(本や雑誌、インターネット上に載っている文章やデータ)を引用する際には、本文中に引用であることがわかるように明記すること、および、文章の最後に引用した文献の情報を一覧できるリストを載せることが必須です。さらに言えば、単に文献を引用するのではなく、なぜその文献を引用する必要があるのか、ということまで文章内で明確になっているものが、高い評価を得られる文章と言えるでしょう。

最終選考の対象となった作品は、どの作品もそれぞれの問題意識をキーワードとうまく絡めてしっかり明示されていました。そのうえで、論証がきちんと

小論文部門・優秀賞

「世界の食文化の動向～食文化のグローバル化とローカル化のつながり～」

長島 綾さん(文学部 1 年)

「世界とのつながり—日本の ODA」

森木健太さん(商学部 1 年)

「自然保護を問い直す～人の世界と自然の世界とのつながり～」

八坂尚美さん(文学部 1 年)

できているか、すなわち信頼性のある資料を分析して文章内に引用し、自分の主張を裏付ける根拠としている点を評価しました。しかしながら、全ての審査の観点を高水準で満たしているものは今年度の応募作品の中にはなく、それが最優秀賞を選定しない理由となりました。

それでは、入賞作品を個々にみていくこととします。

長島さんの作品「世界の食文化の動向～食文化のグローバル化とローカル化のつながり～」は、「全体の構成」の観点において高い評価を得ました。「はじめに」の部分で問いを立て、さまざまな資料を根拠に問いに対する答えを主張するという流れはよくできていました。食文化の動きはグローバル化だけなのか、という問いに対し、グローバル化の対極となるローカル化を挙げ、さらに、そのどちらでもないグローカル化こそが食文化を豊かにするという主張をされています。ただし、その主張は単に食文化の問題だけにとどまらず、自国愛や企業戦略もからむ複雑な問題という見方もできるのではないかと審査員の指摘もありました。その点を踏まえ、より深い分析・考察をされるとよいのではないのでしょうか。

森木さんの作品「世界とのつながり—日本の ODA」は、すべての観点においてバランスよく高い評価を得ました。日本の ODA は妥当かという問いを立て、批判もあるなかで日本の ODA のやり方は合理的であると主張されています。主

張の根拠としてデータや事例を引用し、手堅く論証できていたところは立派でした。しかし、日本の ODA の是非はすでに議論されていることも多く、森木さん自身の主張としては弱く感じられました。そこで、もう少し踏み込んだ議論として、例えば、被援助国の視点から考えてみる、もしくは、無償資金援助が依存心を生み、自立的な発展を阻害する事例や何らかの根拠を用いて有償資金援助の有効性を論じる、などが考えられるのではないのでしょうか。

八坂さんの作品「自然保護を問い直す～人の世界と自然の世界とのつながり～」は、「自分の立場・意見」を高く評価しました。自然保護の問題は人間にとってどこか「他人事」ではないかという問題意識から、自然保護を促進するためには人が自然を身近に感じられるようにすべきであると論じられました。科学的な視点や人間以外の生物からの視点で考えるアプローチではなく、人間自身の意識を変えるべきであるという意見にオリジナリティを感じました。しかし、自然を身近に感じることと自然保護を促進することにはやや論理的飛躍があるのではないのでしょうか。自然を保護しなければならない者としての「当事者意識」ということばをキーワードに再考してみることで、論理的飛躍が改善されるでしょう。

それでは、入賞作品と喜びの声をご覧ください。

【小論文部門優秀賞】

世界の食文化の動向 ～食文化のグローバル化とローカル化のつながり～

文学部1年 長島 綾

はじめに

近年、技術の発展により、人、物資、情報が素早く、かつ容易に国境を越えられるようになった。それに伴い、文化や生活習慣までもが国境を渡り、異国の地で根付くことがある。このことは文化のグローバル化といわれる。食料白書の資料によると、日本では1988年から2000年の間に、海外からの食料の輸入額が約150億ドル増加した。また、1955年にアメリカ郊外の1店舗から始まったマクドナルド社は現在、世界118の国と地域で約30,000店舗を展開している。これらのことから食文化のグローバル化が世界的に進んでいることは明白であるが、ここでは、はたして世界的な文化の動きはグローバル化のみであるのか、という問いに基づき論を進めていく。I節ではグローバル化の対極である食文化のローカル化の動きについてふれ、II節ではそのどちらにもとらわれないグローバル化という新しい動きについて言及していく。

I. 食文化のローカル化

i. スローフード運動の発祥

食のグローバル化のアンチテーゼとして食のローカル化をうたい、全世界に広がりを見せている動きの一つに、スローフード運動というものがある。鶴見は、世界中の食を画一的にする食のグローバル化とは反対に、各地域に由来存在する多様な調理法・食材・味を楽しむという自然な姿を推進する運動として、スローフード運動を例に挙げている。

スローフード運動とは、1985年に食のグローバル化の象徴ともいえるマクドナルドが、食の伝統に誇りを持つローマへ出店を企てたことに抗議をするため、市民が始めた運動である。島村は、スローフード運動が反対しているのはファーストフードそのものではなく、世界中でいつでもどこでも同じ味・同じ質を提供するというファーストフード的な考え方であると述べている。現在その

運動の中心となっているのがスローフード協会というNPO団体であり、協会には世界150カ国に1300以上の支部を有し、運動への参加者は10万人以上にもなっている。

このように運動の規模を見ても、まさにスローフード運動は、世界的に進行する食文化のグローバル化に対抗する、ローカル化の世界的な推進を目指す運動だといえる。

ii. 日本でのスローフード運動

ローカル化を推進する運動は、すでに述べたスローフード運動のような世界規模のものだけではなく、日本国内においても行われている身近なものである。小林は、「地産地消」「身土不二」などの標語を掲げた食文化のローカル化を目指す活動が、日本の全国各地でも行われていると述べている。「地産地消」とは、ある地域の生産物・資源はその地域で消費するという意味の言葉であり、「身土不二」は元々仏教用語であるが、ここでは地元の生産物とその地で育った人間の身体は切り離せないという意味の言葉である。また、小林によると、これらの活動は、「食が移動するより、人が移動することによってその土地の食べ物を味わい、その土地の農業や食文化の維持に貢献することのほうが良いとの考え」を主軸として行われているという。

この理念は、前述のファーストフード的考えに反対して活動を行うスローフード運動の理念とは多少相違がみられる。しかし、これらの運動が最終的に目指すものがローカル化であるという共通点から、両者は規模だけが異なる同様の運動と述べても、必ずしも全ての人が反対するとは限らないだろう。

II. 食文化のグローバル化

近年、グローバル化で画一化しているといわれる食・ファーストフードのなかでも、その地域の特徴をも取り込んだ、新しい食のスタイルが形成されているというケースがある。それが、ローカル化という動きである。ローカル化とは、全世界での展開を目指しながらも、各地域の文化や伝統にも応じる形でサービスを提供していく動きを指し示すものである。実際、食のグローバル化の

代表例になりつつあるマクドナルド社も、日本でいうならばテリヤキマックバーガー・とんかつバーガーなど、アメリカの食文化であるハンバーガーと日本の食文化を織り交ぜた新たな商品を生み出している。また、宗教上の理由で肉を食べることが禁止されているイスラム・ヒンドゥー圏にあるマクドナルドの店舗では、通常のメニューの代替品として、それぞれに禁止されている肉を使用しない製品が提供されている。

ここで例を挙げたように、ローカル化の動きは、食のグローバル化ともローカル化ともならない、新しい食の多様性を生み出していると考えられる。

結論

以上に述べたように、論を進めてきた結果、世界的な文化の動向はグローバル化だけに限らなかった。

まず、文化のグローバル化の急速すぎる進行に危機を感じ運動を始めたスローフード運動や、日本独自の視点で「地産地消」、「身土不二」を目指す運動などにより推進されている食文化のローカル化という動きがあった。

次に、グローバル化のなかで、さまざまな地域の文化的需要に応じてローカルな要素も取り入れていく、ローカル化という新しい動きがあった。

食文化のローカル化は、新しい動きであるゆえ、これからさらに多様な食文化を生みだしていくと考えられる。ローカル化の動向に関心を向け、時代によって変化する食文化の未来に注目し続けることは、現代を生きる者たちにとって大きな課題となると思われる。解明できた点は必ずしも多くはないが、少なくとも当初抱いた問いの解明については寄与できたと思われるので、ここで筆を置くこととする。

参考文献

島村菜津『スローライフ、スローフード』、大谷ゆみこ編、メタブレーション、2004年
小林雅裕「食のありかたを問い直す運動:加賀野菜とスローフード運動」、2003年

長島さんの喜びの声

このたびは、「考動力」作文コンテストの優秀賞をいただきまして、誠にありがとうございます。このような賞を受賞できたこと、大変光栄に感じております。関西大学に入学した当初、私は、高校までの学習とは異なる「答えのない問題に取り組む」という大学特有の学び方に対し、戸惑っていました。今までしてきた学習方法では通用しないレポートや論述の課題に、不安も覚えました。しかしレポートの書き方のルールを学ぶ授業や、論理的な文章を作る授業などを受けるうちに、抱いていた不安も徐々に消えていきました。そして、そうして得てきた自分自身のテクニックや文章力を踏まえ臨んだのが、この「考動力」作文コンテストでした。そのコンテストでこうして賞をいただけたことは、一年間の学びが自分自身の力になっていることに気づけた貴重な機会でした。今回の経験を自信にし、二回生以降の新たな学びに勤んでいきたいと思っております。このたびは本当にありがとうございました。

【小論文部門優秀賞】

世界とのつながり—日本の ODA

商学部 1年 森木 健太

グローバル化が進む現代において、国際協力は重要なものとなってくる。国際協力には PKO（国連平和維持活動）、NGO（非政府組織）などの方法があるが、その中でも大きな役割を果たすのが ODA（Official Development Assistance：政府開発援助）である。このレポートでは、日本の ODA の妥当性について論じる。日本の ODA の特徴や問題点を考察し、批判の多い現代の日本の ODA のやり方は合理的であることを主張する。

そもそもどうして国際協力が重要なのだろうか。なぜなら、グローバル化が進むにつれて世界の国々との関わりや結びつきが強くなり、一国の問題をその国だけの問題として捉えるのではなく、世界全体の問題として取り組む必要があるからである。先進国と開発途上国との格差は大きい。2013年の GDP ランキングにおいて、最下位のツバルの数值は、1位のアメリカの数值の約 44 万分の 1 であった。また、開発途上国では貧困層の拡大や感染症、紛争、テロなどの多くの問題を抱えている。世界中から様々なものを輸出している今、開発途上国に対して援助をすることは非常に重要なことであり、これらの国々に平和と安定をもたらすことは国際社会全体にとっても大きな利益となる。小浜裕久は、日本はなぜ開発途上国に援助をするのかという問いに

対して、「長期的な国益のためである」と述べている（小浜 2005,p.48）。

ODA は、政府または政府の実施機関によって開発途上国または国際機関に供与するもので、開発途上国の経済・社会の発展や福祉の向上に役立つために行う資金・技術提供による協力のことである。開発途上国に供与することを二国間援助、国際機関が開発途上国を支援できるように、国際機関に対して供与することを多国間援助という。二国間援助には、開発途上国の発展に必要な資金を贈与する無償資金協力、資金を貸与する有償資金協力（円借款）、開発途上国に技術を伝え、開発途上国の担い手となる人材を育成する技術協力、の 3 つの形態がある。

日本の ODA の歴史は 1954 年に始まる。もともとは東南アジアの国々に対する戦後賠償の目的で始まった日本の ODA であったが、その後急速に拡大していき、近年は世界第 3 位～5 位を推移するようになっている。

日本の ODA には主に 3 つの特徴がある。1 つ目は、無償資金協力ではなく、被支援国が返済を要する有償資金協力の比率が高いことである。2 つ目は、道路、橋、鉄道、発電所などのハードインフラ整備の占める割合が大きいことである。過去にはハードインフラ整備において、請負企業を日系企業に限定するタイド（ひも付き援助）の比率が高いことが問題視されていたが、現在では日系企業だけでなく開発途上国の企業も入札できるアンタイト（ひもなし援助）が有償資金協力においてほぼ 100%の比率になっている。3 つ目は、アジアに対する

ODA が大きいことである。これは、主に地理的な理由によるもので、ヨーロッパはアフリカ、アメリカはラテンアメリカに対する ODA が大きくなっている。また、もともとは戦後の賠償責任のためであったことも挙げられる。

日本の ODA は、有償資金協力の比率が高いことで批判される。すなわち、無償資金協力（贈与）の比率が低いということである。日本の贈与比率は、2010年と 2011年の平均値で 54.7%である。これは、DAC（開発援助委員会）加盟国 27カ国（当時）中 23位（うち 4カ国はデータなし）であり、DAC 諸国平均の 85.8%を約 30%下回っている。しかし、これは悪いことなのだろうか。日本の ODA には「自助努力の支援」という理念がある。これは、被援助国が自助努力に基づいて自国の開発を進めることがその国の真の経済的自立につながるものであり、ODA はその手助けをするものであるという理念である。無償資金協力というかたちでの援助は、依存心を生み、自立的な発展を阻害してしまう可能性がある。日本も、かつては世界からの援助を受けていた。東海道新幹線（東京～大阪間）や東名高速道路などは、海外の ODA によって造られたものである。日本は、1953年から 1966年の 13年間に総額 8億 6290万ドル（現在の価値で約 6兆円）の借款を世界銀行から受けたが、1990年 7月に完済した。有償資金協力による自立的な発展に成功したのである。とはいっても返済能力の乏しい国へ有償資金協力での援助は少し難しい。特にそのような国が多いアフリカへは、日本の贈与比率も高くなっている。

しかし前述のように、日本はアジアへの ODA の割合が高い。アジアはアフリカに比べて発展している、すなわち返済能力のある国が多い。そこで、アジアの国々へは有償資金協力というかたちで援助をするのが最適であるのではないか。

開発途上国は様々な問題を抱えている。先進国である日本は、こうした問題に積極的に取り組む必要がある。しかし日本が全て無償で援助してしまうのは

自立という観点で見ると、あまり良くないのではないか。あくまでも ODA は、開発途上国の自立を手助けするためにあるのだ。

参考文献

小浜裕久、『日本の国際貢献』、勁草書房、2005 年

久保田勇夫、『Q&A わかりやすい ODA』、ぎょうせい、1998 年

外務省、『2013 年版政府開発援助 (ODA) 白書 日本の国際協力』、文化書房、2014 年

外務省、

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html>、2014 年 12 月 18 日確認

IMF-International Monetary Fund、<http://www.imf.org/external/index.htm>、2015 年 1 月 7 日確認

森木さんの喜びの声

この度はこのような賞をいただき大変嬉しく思います。

応募の理由は、實淵先生の「文章力をみがく」という授業での最終レポート課題を「考動力」作文コンテストへ応募することになったからです。

テーマを考えるのには少し悩みましたが、語群の中から「世界」と「つながり」というワードを取り上げたときにまず、国際協力という言葉が思い浮かびました。そして、私の所属する学部と少し関連づけて考えた結果、ODA をテーマとした論文を書こうと思いました。

論文を書く上で、最後の方まではっきりとした結論を決められずにいたので、どれを根拠として文章を書こうか苦労しました。また、私自身、ODA に関する知識があまりなかったため、論文へ取りかかるまでに多くの時間を費やしました。

最後に、私は、實淵先生をはじめ、授業内で関わった多くの方々のご協力があったこの賞をいただくことができました。この場をお借りして皆様へお礼申し上げます。

【小論文部門優秀賞】

自然保護を問い直す～人の世界と自然の世界とのつながり～

文学部 1 年 八坂 尚美

我々が自然保護を語るときに、「生物多様性」や、「森林の二酸化炭素吸収作用」といった、実感を得にくい生物学的・科学的意義がどこまで人々の心を動かすだろうか。また、「温暖化で＜私たち人間ではなく＞白クマが困っている」、「＜私たちではなく＞地球が泣いている」といったような、あたかも人間社会以外の別の世界の話として自然保護が訴えられる場合、私たちは白クマがかわいそうだとは思っても、やはりどこか対岸の火事として認識してしまうのではないか。このように、本来不可分であると誰もが理屈では理解している「人の世界」と「自然の世界」、この二つが頭の中で分断されてしまうことが、自然保護の実施の上での大きな障壁になっているのではないだろうか。本レポートでは人と自然との身近さという観点から、近年の人々の自然に対する考え方を考察し、里地里山を例に実践可能な現状の打開策を探っていく。

自然への関心の低下が招くもの

環境省の平成二十五年版環境白書によれば、環境問題への取り組みに対する考え方について、93.3%の人が、日常生活における一人ひとりの行動が環境に大きな影響を及ぼしていると回答した。また、将来世代に残す社会で重視されるべきものは何かという問いには、良好に保全された自然環境や生活環境と答えた人が 69.5%にのぼった。しかし一方で、自然への関心が薄れていることを示すデータがある。環境問題に関する世論調査(内閣府)を基に、平成 26 年の回答割合で同調査平成 21 年比での増減率を算出したところ、自然について関心が非常にあるとの回答が-40%、ある程度あるが+13.7%、あまりない+24.7%、まったくない+31.2%となっていた。つまり我々人間は自然環境に対する影響力を自覚しており、かつ自然と良好な関係を将来にわたって続けてゆくことを夢見ながらも、少しずつ自然への関心を失っている。この数値の裏には自然の少ない都市部への人口集中による、人の世界と自然の世界の物理的分断と、それに伴う精神的分断という問題が潜んでいるのではないだろうか。であれば、この問題

の解決のためには、自然が身近にあることが重要となる。では、人間と自然とが分断されていない世界とはどのようなのだろうか。かつて日本に多く存在した里地里山を例に考察を試みる。

一つの世界・里地里山

里地里山とは、武内によると「里山のほかに、農耕地(畑、水田)、ため池、水路、農村集落など」を含むトータルな農村景観と定義されている(武内 2013: 168)。いわゆる伝統的田舎の風景だ。自然という言葉聞いてそのような情景を思い浮かべる人も多いだろう。しかし里地里山の森林は、手つかずの自然ではない。人間が手を入れ維持・管理をしていた二次林である。主に薪や炭の原料として利用する木材資源の供給源として、伐採し尽くさないよう配慮しながら利用されていた。またその周辺の田畑・水路なども人工の環境である。しかしそこには、人の手の入らない原生林に住む生物とは別種の生き物たち(例えばカエルやメダカ、タガメ、ギフチョウなど)によって、豊かな生態系が築かれていた。原生林と違う生態系の構成種が存在するという事は、巨視的に見ると里

地里山は生物多様性に寄与しているといえる。人間も自然の恩恵を持続可能な形で得つつ、自然も人間の営みを利用して生物を育むという、人と自然が互いの世界の一部をなす一つの調和した世界がそこにはあった。それは人と自然の在り方の理想形であると言える。

自然を身近にする具体策

だが残念ながらこの理想郷をそのまま現代の都市に持ち込むことは難しいと言わざるを得ない。このような理想と現実のギャップを埋めるために、都市部では従来の理想形にとらわれない新たな形で自然を取り入れる必要がある。それも単に緑を植えるのではなく、例えば小規模でも生態系ごと取り入れる必要がある。具体案としては、公園や学校を核に、里地里山のように生き物同士が関係し合って生きてゆけるビオトープを作り、ビルの屋上や壁面には植栽ブロック等を用いて緑を取り入れる。一つひとつの規模は小さくとも、都市と緑が、人の世界と自然の世界がモザイク画のように一つの絵を描く環境作りができれば、

子供も大人も自然を身近に感じることが可能となる。そうすることで、人と自然はつながりを取り戻すことができる。

我々が自然保護に本気で取り組むためには、科学的根拠に基づいた利点を発信することや、人間以外の生物の側に立って自然環境の危機を訴えることも重要である。しかし、それだけではどうしても付きまとう、他人事のような感覚を払拭することもまた重要だ。我々は自然をより身近なものにしてゆくことで、離れてしまった人の世界と自然の世界をもう一度つなぎなおす必要がある。そうして自然のなかに我々人間もまた含まれていることを再認識し、当事者意識をもって世界を見る。そのことが自然保護の近道であると考えている。

参考文献・引用文献

武内和彦・世界農業遺産 注目される日本の里地里山・2013・祥伝社
中村聡・「青き清浄の地」としての里山 生物多様性からノウシカへの思索・2012・九州大学出版会

<環境省ホームページ>

平成25年版 環境・循環型社会・生物多様性白書、2014年12月30日確認

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h25/index.html>

環境問題に関する世論調査（平成26年調査）、2014年12月30日確認

<http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-kankyou/index.html>

環境問題に関する世論調査（平成21年調査）、2014年12月30日確認

<http://survey.gov-online.go.jp/h21/h21-kankyou/images/z11.gif>

おしえてビオトープ、2014年12月30日確認

<http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=2&ved=0CCMQFjAB&url=http%3A%2F%2Fwww.env.go.jp%2Fnature%2Fbiodic%2F2Feap61%2Fpdf.html&ei=bXGQVPqfGYyA8gXFrYGoAQ&usq=AFQjCNFuNRkmbkLKHcrjt07mrhJsBcl59w&bv m=bv.82001339,bs.1,d.dGY&cad=rja>

八坂さんの喜びの声

この度は優秀賞という過分な評価をいただきまして、大変ありがたく、恐縮しております。これもひとえに、「文章力をみがく」の授業で、わかりやすく文章の書き方をご指導下さいました實淵先生と、小論文作成上の様々な相談にのって下さったライティングラボTAの上田先生、わかりにくい箇所を指摘して下さいました「文章力をみがく」クラスの皆様のおかげと感じております。

私は今まで文章を書くという経験があまり無かったため、2000字前後という限られた条件の中、どうすれば自分の考えを考えているまま伝えられるのか、構成や言葉の選択など四苦八苦しました。悩みながら、多くの方の助けを頂いてできたものに評価をいただけ、大変嬉しく思っております。

大学生活で文章を書く機会はこれから増えてゆきますので、皆様にご指導いただいたことを忘れずに活かしてゆこうと考えております。ありがとうございました。

【ショートショート部門講評】

ショートショート部門は、文章の内容を「短編小説よりもさらに短い小説。小説としての構成がしっかりしており、話の展開に意外性のある文章。」と定義しました。この定義に基づき、「ストーリー構成」「伏線とオチ」「描写力」「作文力」「オリジナリティ」の5つの観点から審査を行いました。今年度は、応募作品が6作品と数が少なかったことから、入賞作品を最優秀賞の1作品のみとしました。

ショートショート部門 最優秀賞 「価値」

柴田詠一郎さん（環境都市工学部3年）

柴田さんの作品「価値」は、これぞショートショートであるというお手本のような作品でした。何気ない日常会話に続くオチの一言にこちらも破顔してしまい、意味が分かったときに思わずニヤリとしてしまいました。落語のような趣も感じることができ、シンプルでありながら、なるほど、と思わせる作品でした。

すべての応募作品のなかで、「伏線とオチ」の点数が際立って高く、それ以外の観点においてもバランスよく高い評価を得、最優秀賞となりました。

それでは、作品と喜びの声をご覧ください。

【ショートショート部門最優秀賞】 価値

環境都市工学部3年 柴田詠一郎

私が、定年退職するまで勤めていた会社の同僚である、泉谷の姿を見かけたのは、駅前の囲碁サロンだった。

「よっ。久しぶり」

「ん？ おおっ！ 久しぶりだな！

どうだ、元気になっていたか？」

「まあな。しかし、お前も囲碁ができるとは聞いていたが、まさかこんなところで会うとは……」

その後私たちは、近くのソファに座って、雑談をした。家族のことや健康のこと、趣味のことなどについて話した。

「……そういやさ、俺、最近、壺を買ったんだよ」私はそう言って、新しい話

題に移った。

「壺？ ああ、たしかお前、骨董品の興味があるとか言ってたな」

「おう。なんでも、有名な陶芸家の作品らしくてな。けっこう値が張ったよ」私は価格を言った。

「ほお……そんなにか」泉谷は腕を組んだ。「詐欺じゃないの？ それ、本物なんだろうな？」

「もちろんだとも、俺は鑑識眼には自信があるんだ。……それで、買った壺は、筆笥の上に飾ったんだ。そうしたら昨日の朝、ハプニングがあったさ」

「何が起こったんだ？」

「その隣に、辞書を何冊か積んでたんだけど、そいつがバランスを失って、崩れて、壺にぶつかって……そのまま、落としてしまったんだよ」

「えっ」泉谷は目を見開いた。「壊れたのか？」

「いや、幸いにも、たまたま近くに来ておかげで、落ちてる間にキャッチできたんだ。昨日はちょうど、午前中に済ませなければならぬ用事があったから、普段より早く起きていてな。もし、いつもどおり寝たままだったら、間違いなく割れていただろう。早起きは三文の得、ってやつだよ」

「ふうん。それじゃあやっぱり、その壺は偽物だったんだな」

「おいおい……なんでそうなるんだよ」

泉谷はふっ、と笑って、言った。「その壺は、三文の価値しかなかったってことだろ？」

柴田さんの喜びの声

私の小説がこのような高い評価を受けたことについて、本当に嬉しく思っています。小説の執筆は昔からの趣味であり、大学では己の技術を高めるため、文芸部文学パートに所属しました。そこでは、積極的に作品を部誌に掲載したり、それを部のみんなに批評してもらったりして、研鑽を積みました。厳しい意見をもらうことがほとんどですが、それによって自分の小説を新鮮な気持ちで見直すことができました。そういった努力のかいあって、このたびのような素晴らしい結果を残すことができた、と考えています。「諦めずに努力し続ければ、必ず夢は叶う」とは、ある意味使い古された言葉ではありますが、まさにそのとおりである、ということを実感することができました。今のところ、可能であるならば、次回の「考動力」作文コンテストにも応募したいと思っています。

応募して下さった学生のみなさんご指導くださった先生方には、あらためまして感謝を申し上げます。文章を書くことは、決して楽な道のりではありません。その生みの苦しみを乗り越え、時間をかけて作品を完成させて下さったことに、心より敬意を表します。しかし一方で、応募作品全体に対して、ある種の物足りなさを感じたことも事実です。テーマ設定の工夫、参考文献を読み込んだより深い分析と考察、そして言葉遣い等文章表現の改善など、よりよい文章を書くためにできることがまだあるのではないのでしょうか。みなさんの未知の力に期待し、来年度のコンテストにてさらなる力作を読めることを楽しみにしております。

最後に、入賞作品の掲載にあたっては、作者の意思を尊重し、こちらでの編集は最低限にとどめさせていただきます。掲載した文章は、ほぼ原文通りであることを申し添えておきます。

ここでしか読めない特別コラム！

「本が嫌いな哲学者」中澤務（本取組責任者・文学部教授）

哲学は、現代の諸学問の源流であり、古来、哲学者たちはたくさん書物を読み、たくさん書物を書いてきた。だから、哲学者は、さぞ、ものを読んだり書いたりすることが好きなのだと思うかもしれない。しかし、実は、必ずしもそういうわけではない。そうしたことに否定的な哲学者もたくさんいるのだ。

代表例は、古代ギリシャの哲学者ソクラテスだろう。彼は、アテネ市民たちと哲学的対話をして一生を過ごし、ついに一冊の本も書かなかった。彼が本を書かなかったのは、対話こそが哲学だと信じていたからだ。対話とは、個人と個人が取り交わす真剣勝負の議論であり、そこにおいてこそ、そのひとの本当の考えかたが現れるとソクラテスは考えた。書かれたものは、生きた思想の死んだ影のようなものだというわけだ。

ソクラテスの弟子プラトンは、この師の信念を忠実に受け継ごうとした。だから、彼は、師が対話する姿をたくさん対話篇の作品にして残したが、普通の論文形式の本は一切書かなかった。プラトンにとって、真理は、対話を通しての議論の末に、突如、心の中に生まれる直観であり、それを文字で記録しても、その人がそのときに得た生き生きとした直観は伝えられないのだ。だから、プラトンにとって、書くということは、ある意味で、自己否定的な行為だったわけだ。

このようなプラトンの見方にしがたえば、書くことによって知識や思想を伝えようとするのも、書かれたものを読むことによって、他の人の思想を自分の中に取り込もうとするのも、無意味な幻想であることになる。このような見方は、何も古代に限られたもので

はなく、たとえば、19世紀のドイツの哲学者ショーペンハウアーも同じようなことを言っている。彼は、「読書について」というエッセイの中で、読書の弊害を論じ、読書ばかりして、そこに書いてあることを頭に取り入れているだけのひとは、いわば他人の頭で考えているだけだから、なんの意味もないのだと述べているのである。

これらの哲学者たちは、べつに、書くことや読むことは、なんの役に立たないことだといいたいのではない。むしろ、それを過信してはならないと言いたいのだ。書くことや読むことは、自分で考えるための触媒になるときだけ、意味がある。逆にいえば、自分の頭できちんと考えていなければ、何を読んでも、何を書いても、なんの意味もないということなのだ。

平成 26 年度「考動力」作文コンテスト審査員

田中俊也 (教育開発支援センター・センター長、文学部教授)
中澤 務 (本取組責任者、文学部教授)
岩崎千晶 (教育推進部助教)
小林至道 (教育推進部特別任用助教)
毛利美穂 (教育推進部特別任用助教)
西浦真喜子 (教育推進部特別任用助教)
林田定男 (神戸市立工業高等専門学校講師、教育開発支援センター研究員)
佐々木知彦 (教育開発支援センター研究員)
仁村万喜子 (学事局授業支援グループ)
竹中喜一 (学事局授業支援グループ)
宮田 将 (学事局授業支援グループ)

ライティングラボ TA

上田一紀
内田龍之介
王 輯予
小田直寿
狩野博美
黒澤 暁
小林祐也
阪口紗季
施 燕
塩見 翔
園田恵梨果
中野裕史
西川一二
抽冬紘和
日並彩乃
廣瀬有哉
福永健一
松岡隼平
松元 圭
村田 開
森 瑠偉
山田和哉
吉田由似
吉崎雅基
米村恵吾
渡邊朋希

平成 26 年度「考動力」作文コンテスト・大学生の部・表彰式の様子

平成 27 年 3 月 25 日（水）、関西大学千里山キャンパス第 1 学舎 1 号館 5 階のライティングラボ 1 にて、「考動力」作文コンテストの表彰式を行いました。入賞者のみなさんには、お忙しい中ご参列いただきました。誠にありがとうございます。

表彰式は、本取組責任者の中澤務教授による表彰状と賞品の授与、祝辞と進み、最後に全員で記念撮影をして閉会となりました。

中澤教授は、入賞者一人ひとりに向けて丁寧な作品の解説と講評を述べられました。入賞者のみなさんは、それをたいへん熱心に聞いておられました。



表彰式の様子は、関西大学のホームページのトップページ・トピックスにも掲載されました。
(http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/2015/03/post_1347.html)



入賞者のみなさん、 おめでとうございます！

総合図書館ラーニング・コモンズ内ライティング・エリアでも文章作成相談ができます！

ライティングラボは、千里山キャンパス第 1 学舎の 1 号館 5 階で学生の文章作成についての相談に対応しています。2014 年 10 月には高槻キャンパス C 棟 1 階学生サービスステーションでも個別相談を開始しました。さらに、2015 年 4 月 20 日からは総合図書館に新しくできたラーニング・コモンズ内のライティング・エリアでも文章作成についての相談ができるようになります。レポート・卒業論文・発表資料（レジュメ・スライド）や各種志望理由書の書き方がわからない人はラボへ GO！小さな悩みから大きな相談までお待ちしております。

★個別相談の予約→ ラボのウェブサイト内「ラボのウェブ予約」から **TECsystem** へアクセス！

ラボのウェブサイトへは検索サイトで「**関西大学 ライティングラボ**」と検索してみてください。



関西大学教育推進部・ライティングラボ

〒564-0073 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学第 1 学舎 1 号館 5・6 階

[Tel] 06-6368-1411 [E-mail] wlabo@ml.kandai.jp

[URL] <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>